



# 沖

俳句雑誌[おき]

11月号

沖 発行所

# 野郎 豊

能村 研三

## 沖の勉強会

野田吟行

古煙 突背に爽涼の茂木屋敷

さやけしや諸味しぼりの吊り手石

秋 渴き醬油 処の煎餅 買ふ

新 走り 一氣に呑みて 験直し

九月の下旬、新生の静岡支部のもとに勉強会が開かれた。従来の勉強会がややルーチンワーク的な傾向があったため、今回は、約一年をかけて幹事会の中にプロジェクトチームを結成し、勉強会改革を検討した。「勉強会」の名に相応しい内容にすることで、参加してもらった会員が満足していただけるよう、従来のやり方を見直すこととした。

まず第一回目の句会を事前投句制ではなく当日出句することにした。従来は参加者が多くなることから、ほぼ一か月前に係のところに事前に出句する仕組みで行ってきた。

俳人にとって俳句作品は今の自分出来る限り添ったものでなくてはならないと思っているので、一か月前の自分が作った句が選句によって評価を受けるのはいかがかというものが私の持論であった。人間は常に進

ぎんなんを拾ふ一徹な人とみて

静岡勉強会

身に入むや野郎畳の隙間目地

秋気澄む岡部旅籠の撥ね上げ戸

古枕に虫籠組みたる大旅籠

宇津の谷に籠り想といふ秋意

稲伏せて富士遠望と重ね合ふ

歩をしているもので、一か月前の自分と今の自分は絶対違うものだと思っ  
ているからである。今回は静岡駅で  
吟行バスの乗車前にそれぞれの投  
句を集め、別の車でホテルに直送し  
句稿が作成された。

二つの句会に加えて、新しい試み  
としてパネルディスカッションが行  
われ「類想類句について」をテーマ  
に意見が戦わされた。わずか四十五  
分という短い時間ながら、各パネラ  
ーがよかつたせいか締つた討論がな  
された。この他にも懇親会の後にミ  
ニ勉強会や小句会が行われた。

今回会場には、昭和四十七年に開  
催された第一回の勉強会をはじめ何  
回かの勉強会の写真も展示され懐か  
しかったが、今回の勉強会は勉強会  
を始めたばかりの頃の原点に選るこ  
とが出来たように思う。正に勉強会  
のルネッサンスになったことがよか  
った。

# 蒼茫集



白 炎 田 所 節 子

白炎となる噴水の結束力  
三伏の荷物に身体傾ぎけり  
梅肉をのせて小鉢の湯がき鱧  
けふ処暑の風生る空の深さより  
水筒に二百十日の溪の水  
竜淵に潜み思はぬ山津波

十六夜 森岡正作

涼新た外湯へ下駄の向き揃ふ  
毬栗に腕白ことば詰まりある  
曼珠沙華伊賀も甲賀もなかりけり  
あら汁の骨を分けある厄日かな  
旧びたる蔵の門昼の虫  
十六夜の客を待ちある占ひ師

整 列 辻 美 奈 子

横向きに列車に揺られある秋思  
ホチキスの針の整列秋つばめ  
穠穂のみんな背伸びをしたがりぬ  
秋蟬や規範てふ語のきな臭く  
はじめから道ある花野つまらなし  
藤の実や明日になるのをいつも待つ

盆の酒 梅村すみを

平和の火しづかに雨の広島忌  
身を躲すごと風を梳く夏のれん  
天皇のすこし猫背や敗戦忌  
禿げ具合互に笑ひ盆の酒  
葉がぐれに怨みの色の葛の花  
人肌の爛こそよけれ月今宵

小首程 池田 崇

子と孫を迎ふだけなる盆支度  
出出しよりびたりと揃ふ踊りの手  
乗り易き性乗りのりの盆太鼓  
流燈の一つが渦を抜け切れず  
括られてより不機嫌に萩乱る  
小首程傾ぐ穂なりし水落とす

回遊魚 千田百里

軒を覆ひて苦瓜の綱渡り  
菊月の神官を待つ更地かな  
衣被つまむ紅差指が邪魔  
赤い羽根付けて銀座の回遊魚  
破蓮の気骨反骨畳みをる  
男ひとりこぼして花野行きのバス

何処かで 吉田政江

刈り笹の音を束ねて処暑の風  
冷まじや地球の永の片重り

スーパームーン澄む何処かで命生る  
身の負ひ目みえ隠れして葛の花  
腹蔵とは苦瓜の種の真つ赤  
早昼につき合つてをり敬老日

方舟 荒井千佐代

昼寝覚め夢のつづきの波の音  
千日を姉の病み伏す百日紅  
風鈴を指もて鳴らす別れ来て  
はたたがみ吾に家族てふ方舟や  
要らぬもの殖やす現世や秋澄めり  
分骨を了へし夜の菊膾かな

ホームドア 甲州千草

釣瓶落しホームドアとは重たげな  
飛び交うて火照る方言運動会  
餅菓子のお包みの湿り新松子  
おぶひ紐もう捨てやうか零余子飯  
ぐうの音も出ぬほど絞られてかぼす  
種鶏頭暮れて古武士のけはひせり

夕星 大川ゆかり

あさがほや全部肯定したくなる  
なんでなのだらうと烏瓜の花  
夕星や影も涼しき竹細工  
指笛を吹いてみせる子草の花  
群青も藍も実りや山ぶだう  
みどりごの言葉は露の雫かな

伝説 広渡敬雄

櫓に絡む草の離れて秋の雲  
底紅やまだ日の暮れぬうちの風呂  
水塊の中から秋刀魚抜きにけり  
伝説は自らつくれ新走  
天の川森の奥より現れし  
雪舟の画の中に僧秋の風

秋の光源 宮内とし子

ふり返るたびに小さくなる花野  
さざ波は秋の光源沼広し  
森の中露草瑠璃を通しけり  
柱なき穴も遺跡や秋の風  
豊の秋駅弁にある紅しやうが  
馬小屋に二百十日の守り札

ひしほの香 楠原幹子

涼新た疎遠の人に文を書き  
桐一葉けぢめつけねばならぬこと  
手にのせて充実の黒葡萄かな  
良夜なり逆上がりなど子につられ  
この街のひしほの香り実むらさき  
鰯雲誰かが手繰り寄せてをり

次の地へ 林昭太郎

けさ秋の引抜いて買ふスポーツ紙  
稲妻や外して温きイヤリング  
自販機の灯を遠巻きに虫時雨  
手を振りて明日会ふ別れ鰯雲  
地を擦つて戻る巻尺露しとど  
蓮の実の飛んでサーカス次の地へ

醜嗅ぐ 菅谷たけし

荒神輿ひかりの水を浴びにけり  
生き下手はたぶん死ぬまで法師蟬  
うしろの樹ほど暗かりし法師蟬  
五欲健在と宣へり生身魂  
狼の子供のやうに醜嗅ぐ  
小鳥待つ姿とも見ゆ頬杖は

仮縫ひ 久染康子

鬼の子は蓑仮縫ひのまま遊ぶ  
姥捨めく花野の奥へ連れられて  
裾すこし広げて秋の瀧となる  
廃屋を取り巻く蕎麦の花ざかり  
招かれて釜のまん前芋煮会  
かまつかの下葉うらなり色をして

馬 齡 渡部節郎

幽天に稜線研ぎ出す星月夜  
新涼や解体音の止む間合ひ  
音もなく霧を零してダム百丈  
縹渺と影を山湖に秋の雲  
濁り透くいつしか秋の河口かな  
馬齡営々未だ八割百日紅

今日の幸 宮坂恒子

炎天の底に真水のやうに座す  
一碧の秋天で足る今日の幸  
爽やかや搾乳缶に牛の名が  
頂相の眼窩に光り秋に入る  
岳風を身にひびかせて稲を刈る  
一生の今が紅葉の彩かとも

秋 風 細川洋子

漆黒の身に入む小面の裏よ  
秋風の吹く方へ引き返しけり  
踏切の音も黄昏れ白粉花  
飄飄と風のさまよふ糸瓜棚  
花野みち短調の楽湧いてきし  
昼の虫消化試合の続きをり

口 笛 武藤嘉子

空蟬や軽やかにして重きもの  
浮き沈みして流燈の行方かな  
今生きてをり出穂風に包まれて  
誰が吹く口笛秋天透きとほる  
とある日の私がをりぬ蓼の花  
吾とりもどす新涼の川かぜに

蟋 蟀 大畑善昭

ざぶざぶの朝露賢治生誕日  
よく励む人に朝日子貝割菜  
信心の蟋蟀かおんころころと  
手つかずの時間いつばい花野の子  
胎の子は胎に遊泳秋うらら  
草ひばり夜通し空の明るくて

# 潮鳴集

マグマ 齊藤 實

実柘榴や地球はマグマ噴きこぼす  
アイロンに力の入る厄日かな  
白桃を一つ取り出す怖さあり  
秋夕焼少し焦げたるたまご焼  
新米の照りが夕餉を明るくす

絵タイトル 栗原 公子

捨てし家も今底紅の盛りなむ  
哀しみに果たてのありや罌雲  
今朝秋のわが影すこしやさしかり  
絵タイトルに瑠璃色の花風は秋  
三日月に雫のやうな星ひとつ

やはらかき手 矢崎 すみ子

手の中にやはらかき手や七五三  
絹の町水引草に雨兆す



筆順に正しく墓を洗ひけり  
夕立に嘶く馬も甲斐信濃  
山の湖の朝霧籠り櫂の音

向日葵の種 石川 笙児

木下闇鬼は帰つてしまひけり  
光堂洗ふがごとし蟬しぐれ  
同族村落向日葵の種黒々と  
国東に仁王のあまた草の花  
一の関一の蔵元あらばしり

前途無効 関根 揺華

恐竜の骨の吹かるる厄日かな  
銀河濃し前途無効となる切符  
つくづくと秋刀魚の長し喜寿となる  
台風一過海の辛さの薄まらず  
花野ゆく柩は人と行き合はず

# 沖作品



向日葵や昔の恋は振りむかず  
気風きふうよき江戸風鈴の音を選ぶ  
富士塚の海抜を聞く涼しさよ  
新聞を門辺にひらく今朝の秋  
残暑なほ素焼の鉢に水を足す  
これよりは白黒つけず心太  
洗ひ髪いくたび雲のかかる月  
葉の上に刹那転びし蓮華  
香水や心の隙に嘘少し  
大学病院の迷路抜け出し大西日  
棗煮る母の秘伝をそのままに  
蓼虫や山の途中の五合庵  
次もまた通過電車やこぼれ萩  
天領の島の突端海桐の実  
悪茄子居心地よくて良く育ち

東京

磯貝 尚孝

長崎

福山 和枝

神奈川県

会田三和子

# 能村研三選

蘆の穂のさみどり水の香を溜めて  
辛抱のポプラの瘤やつくつくし  
糸を繕る形は祈り秋澄めり  
取説の厚さに挑む夜長かな  
願掛けの吉報を待ち新松子  
カーテンの襞の陰影秋立ちぬ  
巻貝の奥に潮鳴りソーダ水  
片陰の給水ボトル走者待つ  
薔薇窓へ祈り涼しき朝の弥撒  
初秋の陽射し十指に野菜採る  
帰省する邇上のやうに島めざし  
休漁の赤旗立てり芋嵐  
星月夜潮のかをりの逢瀬かな  
まだ青き初穂は月の雫かな  
秋風や高野豆腐の象牙色

東京

平松うさぎ

千葉

小河原清江

福岡

小田 里己

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

向日葵や昔の恋は振りむかず 礒貝 尚孝

昔は恋愛、結婚に対しての思いは今よりはるかに純粋で一途だったと思う。振り返ることなく一途に突き進んだものであったが、今は自由に好きな人と結婚できるし、うまくいかなかったら離婚もできる。恋愛でうまくいかなければ仕事や趣味で気持ちを紛らわせることができる。作者自身も振り向かない恋をかつてしたことがあるかどうかわからないが、向日葵が一途に太陽の方向を向いて花をつけるように、ひたむきな恋があったことが懐かしい。

これよりは白黒つけず心太 福山 和枝

友人との会話の場面であろうか。話が伯仲し、議論が深まってきた。いくら親しい友人であっても、性格や価値観が違えば全ての事に対して頷くわけにはいかない。しかし、この場面で白黒をつけてしまうと、些細なわだかまりが生じてしまうかも知れないと思い、心太の酸っぱさを味わいながら話を丸めてし

まった。いかにも日本人らしい対処方法だったかも知れない。

悪茄子居心地よくて良く育ち 会田三和子

人間でいうならば「悪餓鬼ほどよく育つ」ということになるのかも知れないが、茄子の花によく似た「悪茄子」の花は外来種で、茄子と違って花は下向きではなく棘がある。根がはびこり、繁殖力があり、実は毒を持っているなど嫌われることが多い。作者の庭に蔓延ってしまったのかも知れないが、「居心地よくてよく育ち」という措辞に屈折があつて面白い。

辛抱のポプラの瘤やつくつくし 平松うさぎ

東京の葛飾区にある水元公園を吟行した時の句。北海道大学のキャンパスにあるようなポプラ並木がある。ポプラの木は背が高く、枝は箒を立てたように空に向かって伸びているので見ていると気持ちが良い。しかし、幹をじっと観察してみると、痛々しいほどの瘤をつけている。秋の気配を感じさせる公園には法師蟬が鳴いていた。

初秋の陽射し十指に野菜採る 小河原清江

作者は農業を営むというより、家庭菜園などで季節の野菜や果物の収穫を楽しんでいるのであろう。夏の暑さも一段落すると、秋の陽射しは乾いていて柔らかく光を降り注ぎ、作業をしている十指にも陽射しが透けてくるようので、野菜を採る手元にも収穫の楽しさが増してくる。(以下略)